



目次

厚い掌 — 梶井基次郎の青春 —

あとがき

128 1

高野敦志

今から半世紀以上も前の、昭和四年（一九二九）十二月二日のことだった。私は「罌粟はなぜ紅い」という小説を書くため、神戸のある商家の二階に間借りをしていた。何ともやり切れない時期だった。梶井基次郎との仲を疑われた私は、二番目の夫、尾崎士郎と別れる羽目になり、気を紛らわそうとして、お酒に

睡眠薬を溶かして飲んだりしていた。そのまま事故になって死んでしまっても、と思えるほど荒れていた。こんなことではないかと美容院に出かけ、まだ珍しかったモダンガール風に断髪し、花柄の着物にマントを羽織って街に出たりした。道行く男に振り返られると、自分が捨てたものでもない気がしたものだ。そんな私の心を慰めてくれたのは、梶井からせつせと届いた手紙だった。

その頃、持病の結核が悪化していた梶井は、東京での暮らしに見切りをつけ、兵庫県の伊丹市いたみで療養を続けていた。いつ出歩けなくなるか分からない、と訴えていた彼は、私が取材で関西にいるうちに会いたがった。二人が会う約束したのは、阪急電車の三ノ宮の駅前だった。その日は明け方まで吹き荒れて

いたが、空は青く澄んで柔らかな陽射しが注いでいた。改札から出てきた梶井は、久留米くわむめに黒いマントをまとい、首には太い毛糸の襟巻きをしていた。下駄の歯をカランコロンさせた彼は、こちらの姿に気がつくのと、目を線のように細めてほほえみかけてきた。

「宇野さん」

梶井は決して私のことを、名前で呼ぼうとはしなかった。まだ文壇の一部に知られていただけの彼は、こちらになれなれしく接するのをはばかっていたのか。実はその年の秋にも京都で会ったりしていたが、その折と比べてみても、梶井の頬ほおからは肉がそげて、山のように盛り上がっていた髪も、薄くなつたのを目立たなくするため、短めに刈り上げられていた。しかし、

その印象もこちらの姿を認めた途端、厚い唇に広がった笑みで打ち消された。

トアロードというのは、三ノ宮を南北に貫く大通りである。それをゆっくり北野方面に向かうことにした。その先には異人館の地区へ通じる道がある。肩を並べて歩きながら、梶井は浮き浮きした様子で、道行く人の目がこちらに向けられるのに、胸の高鳴りを抑えかねているらしかった。

「宇野さん、元気になられたみたいですね」

「そう装っているだけ。それって結構疲れるのよ」

「僕の前ではありのままを見せて下さい」

「ほんとは毎晩、尾崎のこと思っ泣いて泣いているわ。いっそのこと上海シヤンハイにでも渡ってしまおうかしら、なんて思っているの」

そう口にした時、梶井の顔がさつと曇った。何も聞かなかつたとしても言うように、前を向いたまま唇を結んでいる。通りがかりの女学生が、こちらを指差しながら笑っている。それにも一向に気づかない様子で、目頭が熱くなってくるのに耐えていた。

「逃げ出したりなんかしないわよ。それぐらい、梶井さんなら分かってくれてると思つたわ。私たちは物書きでしょう？」

「そうですよね。書くことで自分自身が変わえられるんだ」

梶井はつぶやいてから、ハンカチを出して鼻をかんだ。何か言い出そうとして、目をそむけて大空を仰ぎ見るのだった。風に飛ばされるままに葉を散らせたプラタナスは、澄み切った空に盛り上がる筋肉に似た枝を、突き抜ける天に向かって伸ばし

ている。日の光が梶井の瞳を貫いている。痛みをこらえながら、彼の口許には笑みが広がっていった。

「生きているのって素晴らしいですね。今日みたいに穏やかな
天気で、日向ひなたぼっこしてると、それが体で感じられるですよ」

「何を言い出すと思つたら……」

「僕は多くのことは望まない。ただ今日みたいに空が澄んで、美しいものを美しいと感じる人がそばにいて、それだけあれば幸せなんです」

時は二年半ほどさかのぼる。どうして伊豆などに足を運ぶ気になったのか。ある懸賞小説に入選したのがきっかけで、尾崎

士郎と同棲を始めた私は、東京の馬込村に赤い屋根の洋館を建て、新たな生活を始めたばかりだった。川端さんの誘いで出向いた頃の湯ヶ島は、まだひなびた湯治場に過ぎなかった。三島から修善寺まではローカル線でとことこ三十分、更に舗装されていない山道を同じだけ、バスの座席に揺られねばならない。旅館と言えれば氏が「伊豆の踊子」を書かれた「湯本館」を含め、三軒だけしかなかったように思う。川下の西平からさかのぼっていくと、狩野川が猫越川と本谷川に分かれる地点に建つ「落合楼」と、猫越川を上流に向かった世古の滝にある「湯川屋」である。海に面した熱海や土肥とは異なり、盆地にある湯ヶ島は冬はワサビ田にも氷が張り、窓ガラスには霧氷が植物みたいに枝葉を伸ばす。山並みはなだらかで絶景のような眺めはなく、

生える木々も武蔵野で見られる雑木ばかりだ。

私が梶井と出会ったのは、湯ヶ島に遅い春が訪れた時期で、街道に沿って生える広葉樹も芽吹き、山桜の花が若葉の間に彩りを添えていく頃だった。若い者には待ち遠しく、老いた者には物憂いこの季節、私は同宿していた川端さんと、猫越川を左の崖下に見下ろしながら、晩年の梶井が「闇の絵巻」で描いた道を、一步一步踏み締めるように登っていた。まだ若かった川端さんだが、小柄でやせていて目ばかりぎよろりとした容貌は、当時から終生変わらぬものだった。

その時だった。川上から肩の張ったいかつい青年が、洗ったままのさんばら髪に、黒襟の半纏を羽織ってやって来たのは。男は無骨な士のような風采を持ちながら、顔の色は春の日を

浴びて白く輝いて見えた。大きな鼻と口に比べると、目はまぶしいみたいだに細めたままだった。正面まで近づいてくると、横に並んだ私の姿をちらりと認めた。きつと河原で会う約束でもしていたんだ。なのに見知らぬ女と連れ立っているのを、いぶかしく思っているのだろう。

「梶井君は東大で同人誌をやっているんだったね」

「ええ。そちらは？」

「宇野さん、って言ってるね。彼女は才媛さいえんだけど、気をつけなさいよ。夫を捨てて出奔しゅっほんするような女性だから」

むっとした顔を見せたからだろう。川端さんは梶井の方に向き直り、歯を見せてにやつとした。ようやく梶井も緊張が解けたのか、上目遣いでこちらを見ると、恐縮した面持ちで頭を下

げた。

「この人が会わせたい、って話していた学生さんね」

それから数日して、私は川端さんの部屋に呼ばれた。そこは「湯本館」の玄関から入って、すぐ階段を昇った上にある。襖ふすまを開けると縁側に木のテーブルと籐とうの椅子が二つ、一段上がった座敷の奥には、黒光りする柱で仕切られた床の間がある。その前で梶井が囲碁の相手をさせられていた。彼の髪はポマードで固められ、一本一本の筋も際立つほど、きれいに櫛くしが入れられていた。碁を打っている間の川端さんは、ほとんど口をきかずに難しい表情をしている。氏はふいに顔を上げると、碁盤を見つめたままの梶井を、頭上から見下ろす形で囲碁の本を手にした。勝負が決まったので一人になりたいらしかった。

「宇野さん、悪いけど話し相手をしてやってくれないか」

梶井は一礼すると部屋を出て行った。それに従いおいとました私は、彼と肩を並べて川べりの道を登っていった。陽射しが強くなったせいか、半町も進むと襦袢じゆばんが汗ばんできた。木々の若芽も鮮やかさを増している。それに見とれていた私は、坂の途中で立ち止まった梶井が、膝に両手を当てて前屈まえかがみとなり、苦しげに肩で息をしているのを見て驚いた。その視線に気がついた途端、彼は背筋をびんと伸ばして大きく息を数回吸うと、体のどこも不自由ではない、と無理に装おうとするのだった。

「梶井さん」

彼はすぐにはそれに答えられず、呼吸が整うのを待つて返事をした。きつとどこか患っているのだろう。私にはそれが何な

のか分かる気がした。

「梶井さん、一つお聞きしてもいいかしら。どうして私が温泉場に残っていると思う？」

「尾崎さんはどうされたんです」

「数日で戻ってくると言つてたのに、もう一週間も置いてきぼりを食っているのよ」

「女でも出来たかな」

「あの人、きつとカフェーの女給にでも入れ揚げてるんだわ。困っている女の人がいると、手を差し延べなくてはられない質なのよ」

「はーん」

気のない返事をしながら、河原をまたいで伸びる黒い筋を指

差した。それは風もないのに揺さぶられているようだ。

「吊り橋が見えますね。あそこからの眺めは最高ですよ」

梶井に先導される形で、「湯川屋」の近くにある九郎橋の上に立った。そこは川面かわもを覆い尽くすほど岸から枝葉が伸び、隙間すきまからは岸辺の小道と岩の間をどよめく早瀬がうかがえる。それは川下でゆったりした流れとなり、本谷川と合流する辺りで大きく左に曲がる。そこからは「落合楼」のある新宿あじゆくの集落や、対岸の営林署や役場のある地区まで、一望の下に見渡すことが出来た。その時、橋の上で宙吊りとなった二人の上を、青紫色の背をした雀ほどの瑠璃るりが、けたたましい声を上げながら越え、丘の向かい側の西平の方へ飛んでいった。それが視界から消えるや、梶井はふっと我に返ったのか、手探りに似た口振りで語り出した。

「僕はね、高い所が好きなんです。どうしてかって？ 自分は何か思い悩むことがある時、決まって視界の開けた場所に足を運ぶからです。ところで、三年前まで自分には腹違いの妹がいたこと、まだお話ししていませんでしたね」

「ええ」

「それは父が使用人に生ませた子でした。まだ京都の三高に通っていた僕は、母の悲しみを思うと父が許せず、また罪を背負って生まれてきたとはいえ、まだいたいけなその子に、怒りをぶつけることも出来なかった。ところが、その妹の様子がどうもおかしい、と母が気づいて、僕が医者を呼びに行った時には、手遅れになっていました。結核性の脳膜炎にかかっていたんで

す。瞳孔が開いたままの状態で、しばしば襲ってくる引きつけに耐えているさまは、目の当たりにすると胸がつぶれるほど痛々しいもんです」

でも妹が死んだという実感は、葬儀が終わった後も湧かなかつたですよ、と彼は続けた。

「それから一月後、姉の嫁ぎ先である松阪へ遊びに行きました。そこには石垣に松が生えるばかりの城跡があつて、つくつく法師が鳴いていました。市内を見下ろす高台からも、遠くはかすんで見えますでした。その時ふいに、妹を亡くした実感が込み上げてきたんです。それは何でやと思いますか？」

「ふさいでいた気持ちだが、下界に広がる光景を目にして吹っ切れたからよ」

「時々煙を吐く煙突や、田畑のあちこちに建つ藁葺きの百姓家、海から吹き上げた風を受けて走る軽便も、この僕自身の目がとらえたもんやつたからです。そこまで意識は広がりが持てるんやと気づきました。自分の殻の中に閉じこもっていても、何も知ることが出来ないんですね……」

「ねえ、梶井さん。ぜひあなたの作品を読ませてほしいわ」

伊豆の湯ヶ島に早くも、梅雨の季節が訪れつつあった。山並みのあちこちに自生するタマアジサイが、赤み青みを帯びた紫の花を咲かせていき、小止みの合間を縫って雲雀や山雀、頬白カケスなどが、東の間の逢瀬を求めて鳴き交わす。「湯本館」

の部屋の窓辺に座り、狩野川の流れに耳をそばだてていても、原稿用紙の上のペンは走り出そうとしない。このざわめいている川の水は、梶井のいる部屋の前から流れてきたものだ。打ち解けて語り合えたあの日から、彼は夕食後の長い晩を私の所で、しばしば過ぎよくろごすようになつていた。ところが、友人から送ってもらつた玉露ぎよくろと羊羹ようかんを、数日前にお裾分けすそしてくれて以来、宵の口になるとばらつく雨に遮おさられていたのである。梶井がこちらを訪れない日は、ほとんど誰とも口をきかずに、部屋にもつていることが多い。川端さんはその昔に、同人の横光利一の結婚披露宴に出席するため、東京に戻つてしまつていたのである。

梅雨という季節はうつとしいものだ。けれども私はそんな

雨の日に、かえつて安らぎを覚えることも少なくない。本来じつとしていることが苦手なはずの私に、天がしばしの休息を与えてくれるのだろう。植物にしても同じこと。真夏の酷暑に耐えていくには、木々は根からたつぷり水を吸い上げておかねばならない。庇の先からしたたる雫しずくを眺めてみると、浄簾の滝の岩肌からすだれのごとく垂れ下がる、ハイコモシダの群生のことを思い出す。その茎の一本一本には、流れ落ちる滝の飛沫しぶきがまとわりつき、無数の珠の一つ一つには、周囲の空や辺りの緑、躍動する水の戯れが映つて、小さな世界に大きな自然を含んでいる。

尾崎はどうしているのかしら。ペンを握つたままで、つれない夫のことを思い浮かべていた。吊り上がった眉に聡明そうに

秀でた額。けれども口許を曲げて笑った途端、何とも愛嬌のある面持ちとなるのだ。そんなことを考えて一人雨を眺めていると、おのずと素直な気持ちになれる。自分を縛っていたしがらみから解き放たれ、はばかることなく羽を伸ばした私には、すべてが可能である気がしてくる。ウエットな心地に浸れただけでも幸福ではないか。この梅雨の季節の間、自分は蛹さなぎのように殻の内に閉じこもっていた。そしてある日突然、蝶のごとく晴れ上がった夏空に飛び立つのだ。

雨上がりの日の朝、ふいに木の間から差し入る光に、枝葉に載った無数の雫しずくが一斉にきらめき、水分を吸い込んだ石垣からは湯気が立ちのぼる。雲の切れ目から覗いた青空を見上げた途端、熾烈しれつな光線に不用意な眼は射られ、目の前が一瞬真っ赤

に染まってしまふ。待ちに待った奔放な季節、それはこの湯ヶ島にも多くの文人墨客ぼっかくを招き寄せた。東京馬込の「文士村」から、萩原朔太郎、広津和郎らが、そして、梶井の生涯の友となつた三好達治や淀野隆三らも、相次いでこの山里に足を運んだのである。

ある暑い日の昼下がりに、「湯本館」の私の部屋で文士が一堂に会して、句会が催されることになっていった。川に面した窓を大きく開け放すと、廊下へすうっと風が吹き抜けていく。そこに梶井が後輩の三好や淀野を連れて、どかどか入り込んできたのである。すでに萩原さんと広津さんは席に着いていたが、梶井は空いていた私の隣に、当然のごとく腰を下ろすのだった。彼は照れくさそうに目を上げると、簡単な自己紹介をした後に、

ユーモラスな笑みをたたえてこんなふうと言った。

「僕を余程うとましく思っている奴がいますね。名前の『基』をわざと書き損じたふりをして、墓次郎なんて記したりするんですよ。僕のことを生かしてはおけない、とでも言うように」

「憎まれっ子……」って言葉があるでしょ。人からねたまれるくらいでなきゃね」と私が口をはさむと、梶井は三好の肩をぽんとたたいて、「僕が長生きするさかい、こいつはいつまでも救われんやろな」と言った。その強がってみせる表情が、私にはちよつと痛ましく思えたのだが。

「三好君は詩を書いているらしいね」

広津さんが早く紹介しろ、とせかすので、梶井は一つ年上の後輩について、本人よりも知っている口振りで話し出した。

「三好は幼くして養子に出されているんですよ。それから親父さんの事業がうまくいかなくて、中学を退学させられたりして、とにかく苦勞を重ねているんですね。ペシミステックな点があるのはそのせいかな」

「別にペシミステックなんかやない。卒論でヴェルレエ又選んだから、そう思われとるようやけど」

「萩原先生に早う頭下げんか。詩の世界に目を開かせてくれたのは、先生の『月に吠える』や、などと申しておりますので」「そちらの色白の方はどなたかしら」

「三好の横の眼鏡をかけた奴ですか。淀野って言いましてね。彼も作家を目指しているんですが、最近はブルーストとかいう人の小説を翻訳したい、などと申しておりますね」

「お二人にはフランス文学について教えていただきたいわ」

それまで顎あごに手をやったまま、意味ありげに笑みを浮かべていた広津さんは、急に私の眼を覗き込むようにして言った。

「若い学生を三人も侍はべらせて……。また宇野さんの病気が始まったぞ」

「おかしなこと、言わないでちょうだい」

すぐさま私は切り返したのだが、当の三人は何について語られているのか、見当が付かないといったふうだった。広津さんは長者風の落ち着きを見せながらも、男女の道にかけては隅に置けない人物なのである。それまで口をつぐんでいた萩原さんが、めいめい俳号を名乗ったらどうだろう、と提案した。その話を聞き終えるや、うつむき加減でいた三好は、笑いをこらえ

ながら話し出した。

「梶井が僕らの間で、密かに何と呼ばれていたかご存じですか」

「しようもないこと言わんとき」

「もうええやんか」

その時の梶井は大阪弁丸出しで、目を剥むいて三好を睨にらみつけたが、本気で怒っているのではないらしかった。

「僕らが『青空』っていう同人誌をやっていたのは、梶井からお聞き及びのことと思いますが、原稿の集まりが毎回うまく行かぬために、予定通りに刊行していくのは容易ではなかったんですよ。ところが、原稿が出来ていないことを連絡もせず、梶井が家を空けたままにしたもんですから、憤慨たふした仲間が『狸たぬきや狸や』と呼ぶようになったんです」

「書けなくて合わせる顔がなかっただけや」

そう言いながらも、梶井は口許に苦笑を浮かべて、自らが笑いの種とされていることを、半ば楽しんでるようだった。

「もちろん、僕ら学生の間のことだから、その言葉の中に悪意が含まれていなかった、と言ったら嘘になるでしょう。梶井という男はことが創作に関わると、人一倍神経質になるらしいんですよ」

「そりゃそうね。『檸檬』を読ませていただいたけど、そんなところがなければ、あんなきめの細かい文章が書けるはずないわ」

「宇野さんもそう思われますか。ただし、それも程度の問題ですよ。梶井は筆が進まないと、普段の気配りなんか吹っ飛んで

しまい、町の中を徘徊する癖が出てくるんです。一緒に歩いてる時でも、何かアイデアが浮かぶと、そばにいる奴なんかほったらかし。人付き合いって観点からすれば、梶井みたいな男は村八分にされても仕方ないかもしれん。けれども僕らは書く、ってことを最優先に考えて、もっと広い心で接していかねば、と思うんですよ。書く人間が同人として集まる意味は、その辺にあるんじゃないか、って気がします」

三好の話が終わるとしんみりしたせいも、すぐに口をきく者はなかった。その時、彼は多少とも目の潤んだ梶井の方を向くと、おどけたような口調で言い足した。

『狸銭』っていう号はどうや。狸は葉っぱで銭にごまかす。

梶井は文字の連なりに過ぎん小説で、人の心を欺く大狸や」

その句会で私は自分に「千蝶」という名を付けた。各自がそれ相応の俳号をひねり出したのだが、当の句の方は一向に不出来だった。詠まれた作品を選ぼうという段になって、何やら時計を気にしていた広津さんは、手にした筆でさりりと一句短冊にしたためた。

「こけさまにほうと抱ゆる西瓜哉」

「さすがは広津さんね」

驚嘆の声を上げた私を見て、照れくさそうにしているのが滑稽で、その目が妙にいたずらっぽいのが謎だった。傍らにいた梶井は申し訳なきように、上目遣いで広津さんの方を向くなり、いつになく小声でこう言った。

「それは（向井） 去来の句でしょう？ それに西瓜は秋の季語

ですよ」

「梶井君には参ったなあ……。そういえば、芭蕉なんかにも詳しいらしいね」

そう言いながらも、開け放たれた戸口を見やった広津さんは、にんまりとして梶井の方を見返した。というのも、大きな西瓜を胸にかかえ込んだ宿の女将おかみが、一同のただならぬ眼差まなざしは何だとはかりに、立ち尽くしていたからである。

「ここへ来る前に買ってきた奴を、手前の河原で冷やしておいてもらったんですよ」

「おい、こいつはやられたな」

三好に肩をたたかれた梶井は、無口のまま女将から西瓜を受け取ると、縁側のテーブルの上へと移した。句会の方はそこで

中断することになり、私はお皿や匙さじ、それに包丁などを借りに
厨房ちゆうぼうへと走った。お膳の上は片付けられ、率先して包丁を受
け取った梶井は、鼓でも打つみたいに西瓜のお尻をたたいた。
熟れ切ったいい音がするので、浮かれた彼は大仰なしぐさで真
二つに割ってしまうと、その一方に匙を突っ込んで続け様に口
に入れた。

「うまい、うまい。これは天下一品ですよ。皆さんもいかがで
すか」

まるで自分の手土産てみやげであるかのような言い草に、皆は呆気あつけに
取られて顔を見合わせる一方、淀野はいぶかしげな目で三好に
耳打ちした。無邪気に笑っていた梶井だが、辺りの雰囲気気
づいたのか、ようやく額にも冷や汗をにじませ始めた。という

のもその頃すでに、彼が結核であるということは周知の事実で
あったし、その事実を否定したがっている当人こそ、自らの行
為が引き起こした当惑のわけを、熟知していたはずだからであ
る。そこで残りの半分は私が切り分けることになったが、それ
を尻目に梶井は悪びれることなく、ただ黙々と西瓜を食べ続け
て、匙を突っ込んだ半分を一人で平らげてしまった。初めは呆
れ顔だった萩原さんと広津さんだったが、その豪胆さには舌を
巻いたらしく、優しい眼差しでその食べっぷりに見とれていた。
そこにはひたすらマイナスの世界に浸り切り、ついには否定的
な価値そのものを転換する何かがあった。梶井が宿痾しゆくあの結核
と戦ううちに獲得した力を、私はその時垣間かいま見た気がした。

西瓜が皮ばかりになった頃、歓談していた部屋の戸口に何者

かの顔が現れ、私が振り返った時には消えていた。私にはそれが夫の尾崎であることが分かった。何か一悶着ひともんぢやく起きるかもしれない。小用に立った梶井の後ろに付いて、私は廊下へと出て行った。案の定、梶井はお手洗いの手前で尾崎と鉢合わせになっていた。

「によ、女房の話し相手になってくれるそうで……」

尾崎は親しくない相手と言葉を交わすと、決まってももるといふ癖があつた。梶井はあつと声を出した後、その場に凍り付いたように動きを止めた。それはほんの一瞬の出来事だつた。冷静さを取り戻すと深々と頭を下げ、脇を過ぎてかわや厠に入つていった。その後ろに立つていた私を見て、尾崎は意味ありげに唇を歪めて、楽しそうだな、とだけ言った。夫はごく軽い気持

ちでそう口にしたのだろう。虫の居所が悪いのに笑っていられる、などという芸当は、もともと出来ない人であつたから。

その後、私たちは「湯本館」の手前から、川べりの小道をさかのぼっていった。その散策には尾崎は同行しようとせず、梶井の友人である三好と淀野も、遠慮してか行動を共にしなかつた。その辺りは昭和三十三年（一九五八）の狩野川台風までは、鬱蒼うつそうとした杉が対岸の斜面を覆い、早春の頃などは舞い上がる花粉で、山火事が起きたかと思われるほどだった。その中では早瀬の水音もほとんど耳に入らず、木漏れ日の作り出す模様を見つめていると、森はしばし時が経つのを忘れさせてくれた。川幅の方も今よりは狭かつたためか、その分流れはきつく岩と岩の狭間はざまで、飛沫を上げる早瀬はあちこちで渦を巻いていた。

大きくえぐられていゝる木陰の淵は、表面は淀んでいゝるかに見え
ても、底の流れはきつく不用意に入り込んだ者の足をさらう。
対岸の林からはつくつく法師の音が、川の奏でる音と競い合う
みたいに、あの規則的なリズムで鳴いてはやめ、を延々と繰り
返してゐるのだった。

萩原さんと広津さんを先に行かせて、私たちはじりじり照る
光を避けると、木立ちの下に涼を求めようとした。梶井は腰か
らぶら下げた手ぬぐいで額の汗をふきふき、まだ呼吸も整って
いないだろうに、私を後に残す勢いで先を急いでゐる。

「梶井さん、待ってよ……」

その声に先を歩いてゐた二人は振り向き、盛んにこちらに手
を振ってくれる。何だか照れくさい気がした私がうつむくと、

立ち止まってくれた彼が脇に寄り添ってきた。

「書けない時なんか、どうしますか」

「そうね。この河原やあの林の中を歩き回ったりするわ」

「僕もですよ。湯川屋へ戻る道すがらなら、さまざまな想念が
湧いてくるのに、じっと原稿用紙を見つめてゐるだけやと、一
向に言葉が出て来ないんですから」

「そういう時ってどうするの？」

「僕の場合は反古ほごにした原稿の裏に、いたずら書きをするんで
すよ。それは意味のない文字の連なりであつてもいい。とにかく
一定の速さが必要なんです。いわば出来合いの観念かんねんという枷
から逃れ、思わぬ発想とぶつかることに賭けてみるんです。と
はいつても、そうした落書きの類いが、そのまま小説の一節に

使えることはまれですけどね……。そうだ、この流れだつていい」

そう言いながら梶井は河原にしゃがむと、こちらを仰ぎ見る形で目を細め、ひととき幅の狭まった川面を指差すなり語り出した。

「耳を澄ませば川のつぶやきが聞こえてきませんか。前日に降った雨の量やその折の陽射しなんかによつて、さまざまに表情を変えていく川のつぶやきが。その日の気分で子供たちの歓声にも、若い女の歌声にも、年寄りの繰り言にも聞こえてきます……」

その時だった。対岸の卵形の大岩の上に、背が鮮やかな青でお腹が茶色、そして嘴くちばしが銚もりのように尖った宝石を思わせる鳥

が、ちょこなんと止まっているのに気がついた。危うく叫びを上げそうだった私だが、梶井はしつ、と言うと、耳元へささやきかけてきた。

「カワセミですね。じつと水中を見つめていますよ。ほら……」

梶井がそう言うが早いか、美しい鳥は川の流れのゆるやかな辺りに、真つ逆様に突撃したかと思うと、翼を扇みたいに羽ばたかせて水面に現れた。興奮した鳥の頭は毛が逆立ち、羽の青は先端に行くにつれエメラルド・グリーンとなり、光の帯のようなあでやかさで日に映はえた。それは幻としか思えぬ一瞬だった。正気に返った時には、鳥は先程と同じ大岩の上に止まり、嘴で捕らえた小魚を数回、岩の表面にたたき付けて、目にも留まらぬ速さで飲み込んでしまった。

「あの鳥は翡翠ひすいとも呼ばれてますね。僕にはあの羽の一枚一枚が、地下で悠久の時を熱や圧力に耐え、人間に掘り返されてはじめてきらめき始める鉱物と、何か不可思議なつながりがあるのでは、と思えてならないんですよ。翡翠なんて名前を、人はどちらに最初に付けたんでしょうか。あの美しい羽に似ているからでしょうか。それとは逆に、見る角度によって輝きを増す緑青ろくしょうしよく色の石に似ているから？ それなら初夏に咲く可憐な露草の花が、人の心を虚無へと誘う力を秘めているのは、大空の青々とした広がりと同じ色をしているためですね」

梶井の口調には次第に熱がこもり、自らが練り広げたイメー
ジの世界に、没入してしまっただらしかった。その時、広津さん
が大声でこちらを呼んだので、梶井はすぐさま口をつぐむと、

また普段の気さくな素振りを取り戻した。さつき手を振ってく
れた場所に着くと、広津さんが何やら好奇の目で、梶井と私の
顔を見比べているのが気にかかった。ところで、萩原さんの方
はと言えば、一人激流に架かった橋の上にとたざみ、真下で逆
巻く水のたぎりを見つめていた。その向こう岸には更に深い杉
の林が広がっており、その斜面の中程からは、炭焼き小屋のか
細い煙が夏の光を受けて、見え隠れしつつまばゆい空に溶けて
いく。

夢想を破られた萩原さんは、無言のまま私たちの方に目を向
けた。橋の上に立って横から覗き込んだ私は、泡立つ奔流に見
据えられている気がした。きらめく飛沫を弾き飛ばす中心は、
決して一つ所に止どまろうとはせず、こちらの目を引きつけ続

けるのだった。あそこに飲み込まれでもしたら、自我なんてものは女郎の着物みたいにはぎ取られるだろう。ちょうど帯の端を引つ張られて、くるくると舞いつつ肌をさらしていくように。梶井は私の肩越しに渦を眺めていたのだが、傍らの広津さんは私たちの方に顔を向けるなり、見張るような目付きをしたままつぶやいた。

「もの凄い流れだな。こんな川の中へ、誰も飛び込める人はいないだろうね」

「いや、僕が飛び込んでみせますよ」

目が合った広津さんに対して、単に言い返してみたかっただけなのか。ところが梶井が帯をほどき始めたので、私は啞然として声も出せなくなった。梶井君、馬鹿な真似はやめなさい、

と広津さんが叫んだ時には、やせながらも肩幅の広い裸体は、まっすぐ足首の方から落ちていった。それは精神が病んだ肉体を凌駕した一瞬だった。重力に引かれた彼の体はまっすぐ、何のためらいも見せず落下していく。見とれて我を忘れた瞬間、ドボンという音がして波紋の内に裸体が掻き消えると、川面はそれまでのうねりを取り戻した。

梶井はすぐに水面から顔を出すと、蛙みたいに泳いでみせながら、そのままの姿勢で片手を上げると、橋の上の私たちに向かっておどけたしぐさをした。丸で中学生に戻ってしまったかのように、こちらの心配などどこ吹く風、といった無邪気さを見せている。

「どうしてあんな危ないことしたのよ」

震えながら上がってきた梶井は、手ぬぐいであわてて全身をふいたものの、肋骨の周りの皮膚は冷たい水で赤らんでいた。まだ濡れているのに着物をまとうと、どうやら寒気に襲われたらしかった。笑っていた顔も引きつり始めている。病身であることを人に隠すには、まずおのれ自身を欺かねばならない。ただそんな見栄のために、自らの命を縮めかねないことをするのは。私が梶井の危うさを直感したのは、まさにその時だった。

太陽が沈むまでは待てないのか、その頃の梶井は夕食も取らずに「湯川屋」の向かいの「世古館」で、大学の仲間と文学談に興じては酒を浴びていた。宴席が設けられていたのは、二階

の砂利道に面した座敷だった。ヒグラシの鳴き声に促されてか、夏の日がようやく山並みに暮れると、涼風にあおられるようにして、橙色に染まった空を赤とんぼの大群が、互いに競い合うかのように飛んで来る。なぜ無数の虫が命を授かりながら、多くが子孫を残せぬまま死んでいくのだろうか。眺めるうちに梶井は感傷的になり、窓辺から身を乗り出すと、記憶に残る限りの童謡を歌ってみせたという。夏休みは静養していた梶井には最後のものとなるはずで、仲間の来訪は学生生活をしのばせる唯一の出来事だった。

三好は近くの農家に間借りをし、淀野は私のいる「湯本館」に泊まっていた。ほろ酔い気分の三人が淀野を見送るついでに、部屋に押しかけてきたことがあった。梶井らが戸口に顔を見せ

た時、私はちやうど遅い夕食を取っていた。お膳に並べられた料理はと言えば、鮪まぐろの赤い刺身に鶏と銀杏いちょうの茶碗蒸し、小鮎こあじの酢の物、蒲鉾かまぼこと椎茸の吸い物。それに女将手作りのワサビ漬が添えられたが、絶品は鉄鍋で煮られた甘い味噌仕立ての猪いのししだった。十分に火の通った肉は適度に歯応えがあり、野菜の汁と熟成した味噌にからまったのを噛むと、旨味のある肉汁が舌全体に広がり、日頃の憂さなど晴れてしまうのだった。入り込んで来た三人のうち、梶井は鍋から立ちのぼる匂いを嗅かぎながら、幸せそうな顔で味を思い描いているようだった。三好と淀野は次号が出せぬままの『青空』を、このまま廃刊にしたものかについて、盛んに議論を戦わせていた。

女中さんにお膳の上を片付けてもらうと、四人そろったのだ

から麻雀マージャンでもやりましょう、と切り出したのは私だった。三人が乗り気でないのは分かったが、構わず漆塗りの小箱から牌パイの詰まった引き出しを抜いた。麻雀の手ほどきをしてくれたのは広津さんだが、すでに教えた当人に引けを取らぬほど面白さの虜とりこになっていた。各自から東南西北トシナシヤベの風牌フオンパイを取ると、私がお膳の上で掻き混ぜていく。ピヨピヨさえずりに似た音がしたが、動く指先を梶井に見つめられると、妙にこそばゆい気持ちがあった。横一列に並べていると、梶井の視線の向かう先を、三好がそっと流し目で見ているのに気づいた。

麻雀をしている間も、私たちは文学談に熱が入ると、しばしば勝負の方はそっちのけで、各自の持論を披露するのに時を忘れた。梶井は英文科の卒論を出すのを諦めかけていた。一つの

まとまった論を英語で書き上げる気力は、持ち合わせていなかったのだらう。仏文科の三好は卒論にヴェルレエヌの「智慧」を選んだが、やはりどう書き進めるかで悩んでいるらしかった。二人とも文学の研究ではなく、自身の作品を生み出すことに、創造的な価値を見いだしていたからである。

「三好はポオドレエルを原文で読めるからええなあ」

梶井は風呂敷包みの中から紙の擦り切れたノートを取り出した。『巴里の憂鬱』の英訳だという一節が、几帳面な細かい字で書き込まれていた。酔いがまださめ切らぬのか、血走つたような目をしていたが、数行口にしたかと思うと、吐き捨てる調子で分からんと言いざま、ノートを畳に投げ出してしまった。

「宇野さん、僕はこの英語を意味においてしか理解していない

んですよ。三好はどうや。おまえは天性の詩人やよって、フランス語の音の響きなんかまで聞き取れるんやろ」

「詩は口ずさんでみると分かる。リズムと母音の響きがまずあって、ふさわしい意味が付随してくる。藤村なんかもやってることで、『千曲川旅情の歌』の一節を読むと、あの詩がいかに母音の絶妙な組み合わせで出来ているか分かりますよ」

口をつぐんでいた淀野は目を上げ、長広舌をふるい始めた。

「梶井の好きな散文詩やったら、もう少し意味の方が重きをなすんやろなあ。僕は今、ブルーストというフランスの作家の小説を読んでいるんや。自伝的な作品なんやけど、全七巻の大部な上にセンチンスの長さが怪物なんや。とめどもなく続く文章は、翻訳されることを拒んで見るかに見える。いつかは日本語

にしてやろう、と思うとるんやけど難渋するに決まってる。一本の太い幹から枝分かれしていくみたいな文は、項目別に整理された図式に見えてくる。フランス語を文法的に把握した後、目に入る言葉の一つ一つに捕らわれずに、喚起されるイメージなり感情なりを、すんなりと胸で受け止められる瞬間があるんや」

「優れた翻訳っていうのは、もし初めから日本語で書かれたら、ということ念頭に置いてなされていくべきものなのね」

話が終わるか終わらないうちに、感じ入ったらしい梶井は、投げ出されたままの『巴里の憂鬱』のノートを手にとると、三好に突き付けるなり言い放った。

「早うこいつを訳してくれ。おまえの言葉でボオドレエルの魂

と一つになった、という錯覚を引き起こすほど、一字一句におまえの命を注ぎ込んでな。そやけど、うまく訳せたとしても、それだけで満足したらあかん。僕らにとつて最も大切なのは、自らの文学を作り上げていくことなんや。僕らは一気に文壇に乗り込むんや！」

文学の話で盛り上がったせいで、麻雀の方は牌を動かす手もしばしば止まった。時計が十二時を回る頃になると、同じ旅館に泊まっている淀野が引き上げてしまい、三好も間借りしている農家に戻らなければ、と重い腰を上げた。

「一緒においとましようや」

戸口に立って振り返った三好は、私の傍らに座り込んだままの梶井を、いぶかしげな視線で見っていた。三好は唇を軽く噛ん

だま廊下へ出て行った。見送っている梶井は、去りゆく背中に向かって、辛うじて聞こえるほどの声で、ほんまに済まんな、とだけ言った。

二人きりとなったところで、昼間なら窓から見えるはずの、裏手にある河原へ出ることにした。部屋を出てすぐ脇の柱には、一本の箒ほうきが逆さに立て掛けられて、先端に手ぬぐいが巻かれているのではないか。これは毎晩のように長居する梶井を、早く追い立てるためのお呪まじないなのだろう。

一階の板敷きの広間は電気が消えて、裏庭へ出るガラス戸はカーテンが閉められていた。手探りで鍵を開けると、外が明るいのに驚かされる。ぬかるみに足を取られぬように置かれた平石は、月の光に浮かび上がった島々を思わせた。入母屋造りの

屋根は微光のせいで、ぼんやりと幻みたいに目に映る。見上げると真夜中の空は星がまばらで、所々浮かび上がった綿雲は、満月に照らされて銀白色に映えている。梶井は振り返ったまま、こちらに顔を向けているかに見えたが、実は足下あしもとに映し出された影に、視線を注いでいるのだった。

「梶井さんたら、何芝居じみたことをしているのよ」

「影が薄くなってきたているんやないかって、それを調べているんですよ。段々黒が灰色がかってきて、しまいには人の姿が現れるって話、『Kの昇天』という短編に書きましたよね。もちろん僕の空想に過ぎないんですけど。そのうち影は消えてしまつて、気がつくと僕の傍らにそいつが立っている、なんてことも起こるかもしれない」

梶井は数歩進むとまた振り返り、共同の浴場からあふれた湯を河原の石で囲った水面を、怪訝けげんそうな顔で指差すのだった。目をこらすとわずかながら、湯気が幽霊か何かが出現するように、ゆらゆら立ちのぼってくるのが見える。

「馬の湯っていうのよ。足を痛めたりした馬を入れてやるんだけど、膝から下がつかっているだけで、気持ち良さそうにしているの、何度か目にしたことがあるわ」

湯の縁にしゃがみ込むと、梶井は指先をそつと水面に浸していき、目を閉ざしてその温ぬくい感触を味わっている。流れ込む川の水のため、人間にとってはぬる過ぎるはずだが。

「馬ってこんな時、どんな声でいなくんやろ？」

つぶやいた梶井の視線は、湯が川に流れ込んだ先の、やや淀

んだ深みの方に向けられていた。黒い水面には輝きを増した満月が、クレーターまで目に来るのでは、と思われるほど、くつきりと映し出されている。水面に現れた銀白色の影は、形も色も天上にある月と瓜二つであったが、放つ光の強さは劣っていた。

「奇妙な考えに捕らわれるんですよ。例えば今あの水面に月が映っていますね。我々はいわば影に過ぎないんじゃないか、つていう。すると、夜空の月は何かってことになりませんが、そこが人間の魂の故郷ではないか、つてね。僕の存在は水面が揺らげば、すぐ中に溶け入ってしまいます。しかし、それに関わることなく、夜空では月が白い光を放ち続けるんです」

「人は生き続ける限りは、魂の故郷には戻れないのかしら」

「実は『湯川屋』の下の共同湯につかっていた折、不思議な感覚に襲われたことがあるんです。猫越川の岸に石垣を築いて、流れが入り込まぬようにしてあるため、昼間でも地下牢みたいななんですよ。先に牢門を思わせる出口があつて、柔らかな光が射し込んできます。辺りが闇に閉ざされてしまえば、川音のつぶやき以外周りの気配はうかがえません。柔らかな湯に肩までつかりながら、掌で頬を撫でているうちに、表面がすべすべになつてしまい、体全体が溶け入りそうな気がしてきます。夢うつつの状態に落ちていった僕は、何ら欠けるところのない充足した感覚に満たされました。その間、天地の始まりから終わりまで、手に取るように理解できた気がしました。ところが、目覚めた時には、確信は失われていたんです。『やがて僕は死ぬ

んや』という言葉が、まず脳裏に浮かびました。自分が死んでしまった後も、この世は存在し続けるんでしょうね」

「それつて、世界と一体化したいっていう欲望じゃないかしら」
「僕はそもそも貪欲なんですよ。世古の滝で見かけたたくましい胸をした獵師、恥じらうように背中を向けた十五の少女、人の目を忍んでやって来る鹿や、我が物顔で大空を旋回してるトビ、魂のない可憐な露草に至るまで、変身してみたくありません。世界が僕自身であれば、死を恐れる必要など全くない。河鹿かしかを観察している時の自分は、あの醜い姿に乗り移ってゲロゲロ鳴きながら長い舌を出し、生きた蠅を探し求めて、四つ足で跳ね回りたくありません」

ふいに梶井は口をつぐんだ。すると耳に入ってくるのは早瀬

のつぶやくような水音と、間欠的に鳴く鉦かね叩きの声だけになった。川岸に立つ青白い姿が目に入らなければ、私一人であらずでいると思えるほどだ。夜空を照らした月も傾き、ちぎれ雲がかかってきた。梶井は輪郭だけの黒い影となり、暗くなった分だけ夜空にきらめく星の数は増した。言い様のない孤独感に襲われ、何か声をかけずにはいられなくなった。

「梶井さん……」

振り返ってくれた時、再び薄雲の切れ目から満月が顔を出し、秀でた額と膨らんだ頬の辺りを照らし出した。豊かな髪はやや乱れて、数本が盛り上がった眉の上で揺れている。

「今あなたの上に現れている能力は、氷山の一角に過ぎないかもしれないわ。でも私は確信しているの。真の能力は水中深く

深く隠されているのだと」

「引き出せるだけの時間が僕に残されていれば、ですね」

梶井は寂しげに笑うと、うつむき加減で背を向けてしまい、数歩川上に向かって歩き始めた。振り返るといつになく力がない声で話を続けた。顔は周囲の森から忍び寄った闇に、次第に覆われてしまうのではと思われた。

「もう部屋に戻らなければなりませんですが、目に見えるようなんですよ、世古の滝にたどり着くまでの道筋が。西平橋を渡ると右方は道のすれすれまで山が迫り、猫越川は林に遮られるたびに微かな水音すら響かせません。闇の中を提ちようちん灯さげて歩いてみると、自分のすぐ周りしか目に出来ないものです。どの辺りを歩いているかは、川の微かなつぶやきが耳に届くかいな

か、坂道がきつくて息がどれだけ弾むか、によつて分かるだけです。とにかく、明かりを持って立つ自分の他には、世界は存在しない気がするほどです。僕が頼れるのは手元の光だけなんですよ。やがて電灯が前方に現れると、『湯川屋』はすぐそこやと思つて安堵あんどできます。ある晩も電灯が微光を放っていると思ひました。ところが僕のすぐ前を歩く男の提灯の火やったんです。自分はぎよつとして目を疑ひました。というのも、男の風采が僕そっくりやつたもんですから。ドッペルゲンゲルつてご存じですか。いわゆる分身つて奴ですが、そいつがしまいは、本人になりすまして悪さをするつて話です。いよいよ自分も、ほんまに気が変になつてきたんやないか。何度も目をこすることで、幻を眼前から消し去ろうと努めたんです。男の姿が

ふつつりと闇の中に失せた時、かえつて胸の不安は高まりました。そうや、僕も消えていくんですよ、夜の静寂に溶け込むようにして。到底手の届かない淵の底へと。僕は宇野さんにとつても消えてしまふわけですね」

「消えてしまわないわ」

とつきに答えたものの、梶井が黙り込んでしまったところを見ると、私の口調に取つて付けたような色を読み取つたのか。沈黙した二人の間を、川を渡つた風が吹き過ぎていった。鳴きやんでしまつていた鉦叩きが、またチンチンと羽を擦り合わせ始めた。一度は闇の中に消えかけた梶井の輪郭が、雲間から下りてきた月光に照らされ、青白い明かりの中に浮かび上がった。

「そうですか……」

「私にも見えるのよ、あなたが帰ってしまったてからが。人の温もりが抜けてしまった冷やややかな部屋が。窓際の籐椅子にぼつんと座り込んでいる私には、梶井さんたちと過ごした今夜のことを思い浮かべることしか出来ない……。そう、それが薄暗い電灯の下で私に可能な、ただ一つのことには違いないわ。だけど、素晴らしいことじゃない？」

「ええ、僕が目の前からいなくなったとしても、宇野さんにとつては、消え失せたことにはならないわけですね」

湯ヶ島にも夏の終わりが訪れる。それは日が西に傾き始める

頃、谷あいには響くヒグラシの声や、闇が迫ると吹く風に感じられる。日が高いうちは、過ぎた真夏のまばゆい光景が、今でも手に届く所にある気がするのだが、空気がぐつと澄んできて、盆地を覆う空も心なしか青みを増している。余りにも熾烈な光をフィルターにかけることで、山々を飾る^{けやき}櫟や^{なら}檜の枝葉の輪郭を、背後の空から浮かび上がらせる効果があった。

秋が忍び寄りつつある早朝、私は御飯も食わずに「湯川屋」へと通じる道へ出た。日に日に輝きがあせていく太陽が、慕わしく思われてきたからだろう。川のそばの谷は夜が明け切らず、河原からのぼった山の斜面のみが、一日の活動の^{みなもと}源となる光や熱を浴びている。朝日を満面に受けた自分は、木々の葉が発する霊気を肌で味わっていた。地上近くを漂っていても、日が

高くなるにしたがつて、霧散霧消してしまうものだから。梶井さんたちはどうしているかしら。考えていると、足は自ずと世古の滝の方へ向かうのだった。全く自分はどうかしている。早朝に会えるはずなどないのに。九郎橋のたもとにたどり着いても、猫越川に面した「湯川屋」の三階の部屋は、確かめられるはずもない。

岩の間を縫って流れる水音に混じって、低くうなるうめきに似た声を耳にした。二つの叫びが互いに追いかけて、からまり合うみたいに伝わってくる。正気を失った人間が二人いて、怒りで相手を打ち砕くことで、共に大きな嘆きの渦に巻き込まれ、奇妙な一体感を享受しているようだった。吊り橋の中央に立つて目にしたのは、河原で一糸まとわぬまま抱き合う青年の肉体

だった。肩幅が広く骨太のやせた男が、長身で優形の相手を腕にかかえ込んでいた。無造作に脱ぎ捨てられた着物の傍らで、二人は泣きじゃくりながら、互いの涙で髪を濡らしている。自分分は近寄り難いものを感じた。憎しみをあらわにすることで、双方の愛情を確かめ合っているのか。しゃくり上げていた声が止まった。目を赤く腫らした二人がこちらを見上げている。目にしていけないものを見たのだろうか。反射的に背を向けると、下駄が足下の板をカチカチ鳴らし、吊り橋が左右に揺れて転びそうになりつつ、追ってくるはずもない視線を恐れて走った。二人をそっとしてあげるくらいの心遣いが、どうして欠けていたのか。内心では気がとがめていたものの、昼下がりにはもう素知らぬ顔して、「湯川屋」に出かけて行ったのだから。石

段を少し下りた所にあるトタン屋根に足をかけると、恐る恐る五号室の窓を覗き込んだ。

「やあ、宇野さん」

明るい声で呼び掛けてくれたのは、障子を背にして胡座をかいた三好だった。徳利を片手に盃さかずきに酒をついだ梶井は、顔を上げた途端に手が震えて膝を濡らした。こちらの姿をようやく認めたところを見ると、かなり深酔いをしている様子だった。梶井は最初に声をかけられたのが、三好であることすら気になわないらしい。お膳の上には徳利と盃の他、小皿に塩が盛つてあるばかりだった。三好の生え際に傷が付き、赤黒く変色した部分が盛り上がっているのに気づいた。

「どうしたのよ、三好さん」

驚いて甲高い声をかけると、口許だけ笑っていたが、梶井が黙り込んだままなので、ためらいがちに顔を上げると、ちよつと転んで打っただけですよ、と言ってごまかした。

「転んだなんて、お酒でも飲んでいたの？」

口にするが早いか、梶井は声を立てて笑い出した。こちらが睨み返したせいかわ、すぐさま口をつぐんだが、視線を宙に漂わせたまま、顔だけは三好の方に向けている。

「僕は山にこもつとるうちに不思議な力を得たんや。そう思わへんか、三好！ 僕を怒らせたさかい、貴様はつまずきよつてそない傷を作ったんや」

「何やと！」

「あなたたち、いい加減になさいよ」

三好はため息をつき、首を左右に振りながら、二人の仲違いなかたがのそもそもの原因を教えてくれた。志賀直哉に対する評価の相違によるものだ、というのである。要するに、志賀の文学的価値を認めない三好に、梶井が激昂げきこうして食ってかかったというわけだ。言い争いの後、温泉に入ろうとした三好が転倒した際、梶井が「してやったり」と言わんばかりに、得意げな様子を見せたので、寛容な三好もついに堪忍ならぬ、ということになったというのである。

「志賀さんのどこが気に入らないのよ」

「梶井はあの人を師と仰いでいるんですよ。平明な文章が作り物めいた所のない、ありのままの現実を写しているってことは認めます。ですけど、志賀の文に現実以上のものがあるという

梶井の考えには同意しかねますね。もちろん、書くことで体験した意味が明らかになったりはしますよ。何が欠けていると思う？ 梶井。ポエジーや。文学において最も大切な詩が感じられんのか。人間はそれがあってこそ、現実を超える存在を知ったり、好ましい視点を選ぶ自由を知るんやないか」

「おまえは僕を否定する気やな」

「そんなこと何も言っとらんわ。梶井は平明な文体を理想としよるが、自分にはどうも納得がい坎きのや。『城きの崎にて』は傑作やと言われとるけど、あの文体の素直さは稚拙さと紙一重やと思う。主人公が蜂の死んでいるの見つめる場面があるやろ。『それを見ていて、如何にも静かな感じを与えた。淋しかった。他の蜂が皆巢へ入って仕舞った日暮れ、冷たい瓦の上に一つ残

った死骸を見ることは淋しかった。然し、それは如何にも静かだった』とあるけど、淋しいと静かやったら、小学校へまだ上がらん子でも言えるのと違うか……」

私は時折うなずきながら、三好の話に耳を傾けていた。脇で見ていた梶井は、私が三好の肩を持ったと思ひ込んで、血走った目に見る見る涙をため、唇を噛むようにして睨んだ。手酌でなみなみとついで酒をあおると、震えた手から盃を叩き落とした。こらえ切れずに洩らした声がうなりを立て、病んだ気管支を責めさいなんだ。激しい咳せきに襲われたのを見て、寄り添ってしばらく背中をさすってあげていた。

「貴様は……」

そう言ったきり後が続かぬ梶井を、下手になぐさめようとす

れば、矛先ほこさきをこちらに向けられかねない。窓の外からは相変わらず、川の流れが無頓着な響きを伝えてくる。口ごもってしまつた三好は、「おまえは何も分かつたらん」と言つたきり、首を左右に振りながら考え込むのだった。ためらいがちに顔を上げると、梶井に劣らぬ怒りを含んだ眼で睨み返した。

「梶井には現実を見つめる目がある。人間が一生の間に抱ける夢や深い思ひを、短い枚数の中に書き留める力も持ち合わせとる。おまえはすでに、一人の人間以上のものになつとる。誰それに私淑して得られるとか、そういうもとは根本的に違ふんや。自信を持たなあかん。僕は梶井基次郎という作家を、友として得たことを誇りに思うとる。志賀直哉に頭下げる必要などないんや。おまえは自分が書いたもののみに敬意を示し、価値

が何か他の権威に依るものではないことを、よう心しておくことやな」

言い切らぬうちに、三好は自らの言葉に胸がいつぱいになったのか、続けられずに声を詰まらせた。背中をさすっていた掌に震えが伝わり、早朝に聞いた腹の底から絞り出すうめきが、梶井の喉からほとぼりり出た。

「僕はほんまに阿呆や」

二人の葛藤の原因は、果たしてそれだけだったのだろうか。十日ほど上京していた梶井が戻ってきた時、私はひどい下痢に悩まされ、外出もはばかられる状態だった。蒲団から体を起こ

して、女中さんが作ってくれたお粥を食べていると、体調を気づった梶井が駆けつけてきた。具合が良くなってきたと話すと、安心した様子だったが、気がかりなことは他にもあるようだった。

「三好さんのことでしょ。顔の傷ならもう目立たぬくらい回復しているわ。それよりも論文のことで頭がいっぱいらしいの。ヴェルレエヌについて書くには、やはり研究書が手元にほしいんだって」

「それだけでした？」

「顔が酔ったみたいに赤くて、話していても苦しげに胸を押さえたりして……」

「あいつ、なかなか口を割らへんしなあ」

「とにかく、上京する前に梶井さんと飲みたい、とか言ってたわよ」

「そうか、三好も帰るか……」

口を閉ざしてしまった梶井は、目の前にいる私のことなど忘れたらしく、顎の下を撫でながら物思いにふける様子だった。その時、廊下の端からきしむ音が近づいて、部屋の前でぴたりと止まった。そこにひよっこり顔を出したのは三好だった。

「何や、おまえか」

我に帰った梶井は顔を上げ、気のなさそうな声で言ったものの、すぐに目を細めて人懐っこい表情になった。梶井が気遣うような眼差しで、生え際に出来た傷痕を眺めているので、三好は煙たそうな素振りでも返事もせず、私の顔色を探りながら言

った。

「寝ていなくていいんですか。昨日まであんなに加減が悪かったのに」

「三好、もう東京に戻らなあかんそうやな」

梶井は遮るように口をはさむと、立ち上がって三好の肩に手をやり、強引にそこに腰を下ろさせた。

「梶井はどないするんや」

「僕は今少し湯ヶ島に残って、創作に励んでなあかんと思うてる。ここで書いたものと言うたら『冬の日』ぐらいやし」

「宇野さんはどうされます？」

「こんな塩梅あんばいじゃ全く情けないわ。元気になったらすぐここを引き払って、馬込のうちに戻ろうかしら」

「えつ、もう帰られるんですか」

梶井はそう言ったきり、伏し目がちのまま^{まふた}瞼を閉ざした。再び見開かれた瞳には、行かないでくれという訴えと、自らの思い通りにならぬことで駄々をこねる、子供っぽさが入り交じっていた。三好は知ってか知らぬか、悪気のない表情で追い討ちをかけた。

「では僕と一緒に上京しますか」

私がちらりと顔を向けると、三好はにんまり笑っているではないか。それが梶井の神経を逆撫でするのでは、と私は気が気でなかった。梶井はこちらをまじまじと見つめながら、何か言いたげなまま口ごもっている。

「三好と帰られるんですか。それなら僕も一緒に三島まで連れ

て行って下さい。ええやろ、三好も。僕を仲間外れにせんといてえなあ……。実は一度大阪に戻ろうと思うていたんや。両親とも随分会^おうてへんし。ついでに京大で検診してもらおうつもりや。ここで養生した甲斐あって、かなり体調も良うなってきたさかいな」

それはカラ元気に他ならなかった。そんな梶井に対して話の腰は折れなかったが、素人^{しろうと}の自分のはたから見てさえ、病状は進行こそすれ、回復する兆^{きざ}しは現れていなかったから。むしろ望んでいるかのように、梶井は自らの心身を責めさいなんでいた。

「僕には顔を見せることぐらいしか、親孝行は出来ませんからね。そしたらすぐに僕も上京しますよ。皆で新しい雑誌を作ろ

うって話、軌道に乗せたいんですよ。『青空』の連中をまた集めてね。皆と一緒にやったら、こない怠惰な日々を送らんと、もっと効率良う筆も進むはずやし……」

「そやそや。その意気や！ それやったら僕らの道を阻むものは何もあらへん」

なぜ梶井が私と三好の跡に付いてきたのか、自分には分かる気がした。数週間後の十月五日、三人は互いの思惑を胸に秘めたまま、長らく逗留した湯ヶ島を後にした。

梶井の計画は思い通りには進まなかった。京大での検診の判定は、貧血の悪化により今しばらく養生が必要、というものだった。落胆して大阪の実家に戻った梶井は、老いた両親を目の当たりにして、更に心を痛めることになった。そこで湯ヶ島に

戻って創作に専念し、筆によって独り立ちする決意をしたらしい。一方、馬込の自宅に戻った私も、尾崎との再会に胸をときめかしはしたが、興奮は数日のうちには収まった。執筆に打ち込みたくなった矢先、紅葉が始まったという梶井の手紙を受け取るや、居ても立ってもいられなくなり、単身湯ヶ島へ舞い戻ってしまったのである。

秋の伊豆は旬の味覚の宝庫となる。採れ立ての椎茸や銀杏は茶碗蒸しに、熟した柿はそのままが一番だが、軒に吊した生干しの柿はうっすら粉が吹き、中はとろける蜜が詰まっついて、舌に広がるまるやかな甘みはお茶請けに持って来いだ。また名

産のワサビは酒粕に漬ける他に、味噌と醤油で味付けしたおすましに加えたり、餅の中につき込んで餡を包んで食べたりもする。またこの季節はお腹に卵をはらんだ鮎あゆが、溪流でたくさん釣れる時期でもあるが、その年は不漁のせいで客膳にはのぼらず、子供が捕ったのを譲ってくれた、と言って梶井が持つてきたのを、「湯本館」の女中さんに焼いてもらつて食べたりもした。

紅葉の方はと言えば、西平の集落は標高が低いせいとか、まださほど色付いてはいなかった。私は筆を進めることよりも、周囲の山林に分け入つて木の実やキノコを集めたり、お百姓から安く手に入れた秋野菜を台所に持ち込み、夕食に一品加えることの方に熱心だった。そんなある日、梶井が同じ病やまいで養生に

来ていた藤沢桓夫とともに、日が暮れても戻らない、という知らせを受けたのである。この頃の藤沢は川端さんに才能を認められたばかりで、通俗小説まで書く多彩さはうかがえなかった。

その日、梶井が手紙を出しに近くの郵便局に寄つたらしいことまでは、目撃した者の証言で分かっていた。昼間は初秋を思わせるほどの暖かさで、どてら姿のまま出かけてしまった彼だが、日が沈んで吹き出した北西からの夜風に、果たして体調を崩さずにいられるかが案じられた。それよりも藤沢とともに姿を消したこの方が、はるかに人々の不安を掻き立てたらしかった。不治の病に冒された二人の文学青年が、一体何をしでかすと言うのだろうか。西の稜線りょうせんから茜色あかねいろの光が消えた頃、集落の若い衆が消防団の号令で駆り出され、手に手に提灯をさげ

て付近の山林での捜索が始められた。

「結核さ患って世をはかなんでいるだ」

人騒がせなよそ者のために団欒だんらんの時を奪われた女は、苛立たしげにそう言い放ったが、私はそれに抗議しそうになってこらえた。梶井はそんな自らの命を絶つような男ではない。

行方不明の二人が戻ってきたのは、翌日のお昼過ぎだった。

下田方面からのバスを下りてきたところを、使いに出ていた女中さんが見かけ、走って知らせにきてくれたのである。「湯本館」を飛び出していった私は、向かいからとぼとぼ来るどてら姿の梶井を見て、思わず涙があふれそうになり、それが鬱積うっせきしていた怒りを爆発させた。

「一体、何してたのよ！」

その叫びを耳にしてか、近所の人達が家の外へ出てきて、こちらの方をいぶかしげにうかがっている。見ると藤沢は頭を下げているのに、梶井は私と顔を合わすなり、細い目を更に細めて口許をほころばせている。何の悪気もなかった様子で、お土産のメロンをぶら下げた彼は、どうしてそんなにいきり立っているのか、といった顔をしている。その無邪気な表情を見ると、詰問してやろうという思いはくじけた。いつもは青白い面が上気して赤らんでいたが、それは微熱が出始めた兆しと思われた。「どうしていたのよ」

先程の問いを繰り返してみたが、梶井はにやにやして答えようとしない。藤沢が立ち去ってしまうと、彼は押しつける形でメロンを手渡した。それを女中さんに預かってもらおうと、私た

ちは人目を避けるようにして、「湯本館」の裏手の河原へ出ていた。そこは最近雨が少ないせいか、苔のまとわりついた丸石の多くが日にさらされ、晴れ上がった秋空から下りる光は、赤みがかった葉を川面に映している。二人だけになったというのに、何やらはにかむみたいに目をそむけ、うつむき加減のまま流れを見つめている。やがてつぶやくような口調で言った。

「いい体験でしたんですよ」

「いい体験ですって？ あなた……」

「そう大きな声を出さないで下さい。人が寄ってきますからね。僕にとっていい体験、それは何やと思いますか」

「あなたはどれだけ人に迷惑をかけたか、まずそれを反省すべきだわ」

梶井はしばらく口をつぐんだ。ようやく聞こえるほどの声で謝ると、あらぬ方に視線を向けている。そしてこちらを覗き込むと、ためらいがちに先程の問いを繰り返した。

「何かいい構想でも浮かんだってこと？」

「ええ。藤沢君と紅葉の話をしていたら、天城峠あまぎならさぞかし美しかろう、と彼が言い出したんです」

「それで歩いて行ったわけ？」

「まさか。通りがかったバスに乗ったんですよ。途中で下りて峠を登っていくと、山は紅に彩られて一部は茶色に染まり、ペルシヤ絨毯じゅうたんみたいにに西日に映えていました。そして光の届かぬ谷間は、一足先に夕闇に沈んでいたんです。くねくねと山腹を縫う道を進むと、向こうから猪の足を天秤棒に縛り、肩にか

ついで下りてくる二人の獵師が来ました。間もなく日が稜線にかかる頃やったので、不審な目で見られてしまいました。間もなく空は山並みの炎を映すみたいに、鮮やかな緋に染まっていきました。そばに藤沢君がいたにもかかわらず、僕はずっと一人きりになった気がしました……」

「目に見えるようだよ。何だか闇の中に引き込まれていきそうなの」

「秋は多くの草木や虫が命を落とします。山肌を撫でる冷やかな風に打たれなければ、まだ十分に生きていく力があるのに。秋を一生のうちで喩えようと、やはり晩年に当たりますね。稜線からほとぼる残照を目にした時、里に戻るのがいやになったのも、生の終わりを思うがままに生きる自然に、心を打たれた

からやと思います。天井でぬくぬく冬を越そうとする蠅なんかより、成虫となって一月に満たぬ命を、歌と恋に生きる秋の虫が美しいのも分かりますね。こうして山の奥でたたずんでいて、一つ忘れていたことに気づきました。出会える草木や虫は無限に存在するのに、目を向けていかなかっただけなんやな、ということに。夕日を受けて赤い光のすけて見えた葉は、日にかざした嬰兒の掌のようでしたが、いまや風が吹くたびにざわめく天蓋と化していました。大空から光が失われていき、見通しがきかなくなるにつれて、耳の方が冴え渡ってくるのは奇妙なものです。その時、遠くの方から草笛に似た甘い声がしたんです。プー……、プー……。あれは鹿が鳴いているんや。伴侶を求めて呼ぶ声。そう……、鹿にも自分の子孫を残す力はあるんです。

風向きが変わると今度は沢の音がしました。しかし、もう足下近くまで闇が迫っていたので、どこに水場があるのかは見当もつきません。そしてもう一声、プー……。そよぐ風に流された叫びはほとんどかすれ、揺さぶられた枝のきしる音ばかりが耳につきます。ああ、すべては言葉を持つとるんや。そやけど何で自分は孤独なんやろ。気がつくくと天城トンネルは、坂を登り切った先に迫っていました。アーチ状にレンガみたいに積まれた石は、表面がすっかり苔むして天然の岩肌と見紛うばかり。林の中に穿うがたれたトンネルは、周囲の景観にしつくり馴染んでいました。暗がりに慣れつつあった僕の中には、石垣の面に生えた苔のまだら模様も見えましたが、山腹を貫くその穴の中には、わずかな光すら見いだせません。僕がたじろいだまさにそ

の時です、ほとんど耳に届くかどうかの、か細い空気の震動となって、山が語り出すのが聞こえてきたのは……。おまえを束縛するものは何もない。進みたければ進むがよい。たとえ行き倒れになっても、それを心から喜べるなら、と。その間、僕は正面の闇に幻を見ていました。そこには熊に襲われた鹿の断末魔の苦しみがあつたんです。首根っこを食いちぎられそうになり、全身を振り回されながらも、鹿は目を剥むいて熊の方を睨みつけます。とっさに熊はたじろぎました。このまま逃がしてやってもいい、という気持ちにすらなつて。ところがよく見ると、鹿の目は全く別のことを語っていたんです。『おまえを許す』と。たとえそのような最期が訪れようとも、悔いる気持ちがな
いなら、おまえは自分の自由を選べ、という言葉でその声は結

ばれました」

「それで梶井さんは？」

「僕はトンネルの中に進んでいききましたよ。そこは真冬を思わせるほど寒く、たちまち全身に鳥肌が立ちました。ぶるぶると身震いした時、額に冷たいものが落ちてきました。天井の岩の隙間から地下水が漏れているらしく、傍らに出来た水たまりにも雫が落ちる音がします。こんな厳しい環境の中でも、盲めしいとなつたコオロギやムカデは生活を送っています。沈黙の支配する闇の中で、再び響いた雫の音はトンネルを貫き消えていきます。その間隔はこちらの期待をそらすように、次第に間遠まじおほになっていきました。僕はひたすら歩み続けました。しかし、前方から明かりは見えてきません。かわりに遠くから、馬のいな

なきに似た音が伝わってきました。僕はそれを余り気に留めず、闇の長いトンネルを抜けると一面に花園が広がっているという、死んだ祖母が見た夢の話を思い出しました。ところが、その鈍い音に驚いて振り返ると、白い光が背後から迫ってくるではありませんか。初めは点に過ぎなかったものが、見る間にトンネルの内部を覆い尽くすほどの、目もくらむ巨大な光の渦と変わっていました。それとともに頭の中がうなり出すほどの轟ごう音が、物理学で言うドブプラー効果を伴って、鉄砲水みたいに押し寄せてきたのです。光はますます強烈となり、音は鼓膜を破るほどにもどよみました。それは僕に襲いかかり飲み込むことで、こちらの感覚を麻痺させてしまい、そのため互いに打ち消し合うはずの光と闇が、もはや一つの存在と化していました。

狭いトンネルに立ち尽くした自分は、すでに逃げ場を失っていたのです。大声で叫ぼうとしても、それは悪夢の中でのように、耳に聞こえる声とはなりません。あの恐ろしい光に溶かされてもしたら、この自分は永遠の内に消え去ってしまうだろう。『僕はまだ死にたくない！』光に向かって両手を上げた自分は、心の中でそう叫んでいたのです。クラクションのけたたましい音が響き、続いて急ブレーキをかけるタイヤが、闇を鋭い刃物で切り裂きました。あとはエンジンの単調なうなりが、何かを促すみたいにくだますばかりでした。それから僕がどうしたか、もはやお話しするまでもありませんね」

私は尾崎と同じ屋根の下での暮らしに戻った。当時の馬込といえど、なだらかな丘陵には麦が植えられ、収穫が行われる初夏には、垂直に伸びる穂がまばゆい光を放っていた。ひとたび風が吹き過ぎれば、ざわざわという音とともに、砂丘を思わせる変幻自在さで、大気の軌跡を描いてみせるのだった。彼方には池上いけがみほんもんじ本門寺の杜が、陽炎かげろうに包まれかすんで見えたものだ。刈り取られた畑にまた芽が出るのは、からっ風が吹きやまぬ早春で、松林に囲まれた藁葺き屋根の農家の人が、穏やかな春の日和を見逃さずに、肩を並べて麦踏みむぎづみに精を出す姿が眺められた。

馬込が「文士村」の異名いみょうを持つようになったのは、関東大震災で住みかを失った物書きが、尾崎の勧めで移り住んでからである。赤い屋根の二人の洋館には、萩原さんや広津さんなど

の知人が、ひっきりなしに出入りしたものだ。人の好い尾崎は訪れた客に酒を飲ませ、盃を酌み交わすともう友人の一人だと認めていた。酔いが回れば議論はとめどもなく続き、夜が更けても語り足りぬといった有様だった。

ところで湯ヶ島にいる梶井からは、再会して話が見たい、という手紙がよく来ていた。年が明けると待ち切れなくなったのか、「四、五日中に、東京へ出る用事がありますから、馬込のお宅にもお邪魔するつもりです」と書いて寄越した。読み返そうとしたところへ、寝坊していた尾崎が出てきた。その頃、作品の発表先に困っていた梶井に、夫は世話を焼いてくれていたので、喜ぶものとはばかり思ってた。

「梶井さんが上京するんですって」

「ふーん」

気がなさそうな返事を見ると、目をこすりこすりしてこちらを見つめ、テーブルに置かれた朝刊に目を通した。梶井の手紙を読んで聞かせると、尾崎は箸と茶碗を手にしたまま、聞きほれるかのように耳を傾けた。ふふふと鼻先で笑った後は、私が話す間も黙々と御飯を口に運んだ。

「梶井さんが来ること、広津さんとかもご存じかしら」

食器を片付けながらつぶやいた私は、新聞に読みふける夫を放ったまま、気がつくと思われたように家を飛び出していた。そして、広津さんや萩原さんらのお宅にうかがうと、出されたお茶にも手を付けぬまま、「梶井さんが来る」ことを触れて回った。すでに馬込では顔を知られていた彼の上京を、誰もが歓

迎してくれるものと思ひ込んで。

それから数日も経たぬうちに、あらぬ噂が「文士村」に広まっていた。それを知らないのは本人の私だけだった。来客を玄関に送り出したのは夜更けで、周囲で明かりが点つているのは我が家ぐらい。私が洗い場に立っていると、かなり酩酊していた尾崎は、椅子に寄り掛かったまま、だらりと頭を垂れて何やらぶつくさ口になっている。加減が良くないのかと氣遣つてみると、彼はいきなりこちらに顔を向けた。赤らんでいたはずの面からは血の氣が失せ、こめかみの辺りに青筋を立てている。蛇口を締めるのも忘れて、何が尾崎の癩に触ったか自問してみた。私は彼が誰かに何か言われて、虫の居所が悪くなっているのだと思つた。そこで洗い物をするのはよして、彼のかけた椅子の

前にしゃがみ込み、だらりと下がった右手を両の掌で握り締め、真つ赤になつた白目の部分を、怖じ氣づくことなく見据えた。

「千代！」

ふいに尾崎は怒鳴り出した。そして私の手を振りほどいて、いかにも憎々しげに顔をそむけると、横目できつと睨みつけるのだった。「き、貴様の……」と言いかけたところで、彼はどもつて先が続けられなくなつた。私は急に向かつ腹が立つて言い返した。

「何よ。はつきりおつしやい」

「貴様のその、その媚こびを含んだ素振りが氣に食わないんだ。おまえはそうやって、若い男の氣を惹ひく術すべに長たけている」

「何言っているのよ。いつ私が媚を売つたつて言うの？」

そこで尾崎は「私が梶井の上京を言い触らしたのは、彼に思いを寄せている証拠だ」という噂が流れている、と告げたのである。私はその荒唐無稽な言い掛かりに呆れ、それに心を悩ます尾崎も尾崎だと笑い声を上げた。「この私が？ 梶井さんに？ 私が面食いだってこと、あなたが一番ご存じのはずだわ。どうして私があんな男に……」

自分は心外だという思いを誇張することで、後ろめたい気持ちを覆い隠そうとしていた。白々しい口調で言ったにもかかわらず、尾崎はこちらの主張に言いくるめられたかに見えた。ところが、赤らんだ目は大きく見開かれ、腹の底を執拗しつように探ろうとしたのである。私の語調にためらいを聞きつけると、たちまち苦渋くじゆうの表情が顔面に広がった。尾崎の耳には幾度となく入

っていたのだろう。湯ヶ島では夜毎に梶井が部屋に通ってきたことも。しかし、その煩悶はんもんは長くは続かなかった。酔いに打ち負かされただけなのか。はたまた、こちらの言い分を鵜呑みうのみにしたのか。そんな噂に惑わされるよりも、心が広いところを見せたかったのかもしれない。

「そうだよな。面食いのおまえがまさかな……」

自身に言い聞かせるみたいに、尾崎は口の中で同じ文句を繰り返した。彼は眠りの内に救いを求めるかのように、混濁こんたくした意識の中に身を沈めていった。しかし、噂の渦中かちゆうにいる梶井が上京する以上、何かしら悶着が生じぬはずもなかった。

やがて運命の日が訪れた。その夜近くの衣巻省三邸で、ダンスパーティーが開かれることになっていた。主催した衣巻という男は、ハイカラな詩や小説を書き、夫婦そろって美男美女との評判があった。パーティーが開かれるのはアトリエで、そこは天逝した弟さんが絵が書けるように、しつらえられたものだった。パーティーの支度を手伝おうと、私は尾崎より先に家を出ることにした。肩の辺りで切りそろえた髪を、愛用の鬘甲の櫛できれいにとかし、兎の足で白粉をはたいて、唇には濃いめの紅をさしていった。この日のためにと新調したドレスを身に着け、私は恐る恐る鏡台の前へと近づいた。そこには見違えるような若い女が立っている。小娘に戻った気分になって片足でくるりと回った時、戸の隙間から尾崎が覗いているに気がつ

いた。

衣巻邸で光子夫人とともに、酒の肴をこしらえていると、萩原さんに連れられて梶井が姿を現した。久し振りの再会となったわけだが、顔色は以前にもまして良くない。からっ風に吹かれたのが障ったのか、アトリエに入ってから軽い咳は止まらない。やせた頬に笑みをたたえていたが、顎がカミソリ負けしたのも痛々しい。エプロンを上にとったままのこちらを、頭の天辺から爪先まで眺め渡すと、彼はわざとらしく驚いてみせるのだった。

「宇野さんは洋装も似合うんですね」

「あら、梶井さんにお世辞は似合わないわ」

「でも、洋服も見栄えがする人間に着られてこそ、本望なんじ

やないんですか。僕はうらやましいんですよ。外見で人の気持ち
が引きつけられるわけでしょう？」

「人にどう思われるかよりも、自分がどんな人間であるか
つてことの方が大切なんじゃないかしら。それにしても、梶井さん
は存在感があるわね」

私の言葉を聞いた梶井は、照れくさそうにうつむくと、その
まま口をつぐんでしまった。彼を冷やかそうなんて気持ちは、
いささかもなかったのに。その存在感というのは、生命の充溢
じゆういつした相手からほとぼしるものではない。それは枯渇しつつある
命に対する怒りが、運命への抵抗という形で現れる精神的な力
に他ならなかった。

早くも日暮れ時が迫っていた。真冬の老いた日が沈んでいく

と、丘陵の彼方にそびえ立つ富士は、山頂の雪をめらめら燃え
立たせていく。すでに明かりの点ったアトリエでは、尾崎の来
訪を待たずに宴が始められていた。衣巻が蓄音機のぜんまいを
巻き上げると、ラップ型のスピーカーからチャイコフスキイの
「くるみ割り人形」が流れ出した。テーブルはチーズやサラミ、
コンビーフなどの前菜を並べただけだったが、萩原さんは梶井
にビールを注がせて、かなりご機嫌の様子で話していた。

「ダンスが上手な男は得だよ。梶井君も習ってみてはどうかね」
「いや、僕はいつも着物姿ですからね。それに気恥ずかしくて
女性の手なんか握れませんよ」

「そうだ。梶井君に教えてあげよう。ねえ、宇野さん。ちよつ
とお相手願えないか」

エプロンを外して出て行くと、梶井はビールの入ったコップを唇にくわえたまま、まばたきもせず目をごらしている。

「あらいやだ。そんなに見られちゃ踊れないわよ」

そう言いながら萩原さんの手を取った私は、右手の掌を重ねると、左手をそっと相手の肩にあてがった。そして足で三角形を描く形でステップを踏み出した。茶のジャケットに蝶ネクタイといった装いの萩原さんは、酔いが回っていたせいで足がもつれた。危ない、と思った瞬間に痛みが爪先に走った。

「女の足を踏むなんて最低だわ。全く……。いつまで経っても下手なのね。あなた、私のことが嫌いなんじゃないの？」

梶井は空のコップを手にしたまま、ぼかんと口を開けてこちらを眺めている。いくら誘いをかけてみても、萩原さんの二の

舞となるのを恐れてか、固辞して受け付けようとしなない。

「私たちは飲む方が合っているみたいだ。宇野さん、もう一本頼むよ……。私は妻や妹が他の男と踊っているのを見るのが、痛快に思えてならないんだ。こうして酩酊しながら、妻が抱かれて唇を奪われるのを目にしてね。嫉妬の炎で胸がきゅつと締め付けられたところへ、強いアルコールを流し込む時の痙攣けいれんがまたたまらないんだ……」

そう語りつつあおり続けた萩原さんは、次第に正体がなくなっていく、ぼそぼそ独り言を言い始めた。「くるみ割り人形」の方は、ちょうど終曲の「花のワルツ」にさしかかっていた。梶井と話し込んでいた衣巻が立ち上がり、傍らの私の手をさつと取ると、お相手願えますかと言ってダンスに誘った。リズム

の波に乗った二人は、たちまちアトリエに集まった文士たちの目を奪った。その間私は先程萩原さんが口にした言葉を、胸の内で反芻はんすうしていたのだった。

私は台所に戻っていた。気分が悪くなつた萩原さんは帰宅し、入れ替わりに大店おおだなの若旦那風の着流しの尾崎が、唇の端に煙草たばこをくわえて入ってきた。一見無造作な出で立ちにもかかわらず、彼の所作しよさの一つ一つには緊張がみなぎり、くせつ毛に油を付けた髪の本一本にも、意識が通わぬものはなかった。目に見えない力が尾崎の身に満ちて、指先の一押しで破裂するのでは、という不安が頭をもたげた。ところが、唇から煙草を離した彼は、よそ行きの笑顔で巧みに覆い隠し、しまいまで抑え切ることで、自身の豪胆さを誇ろうとしているらしかった。

ちようどその時、梶井は衣巻とビールを飲んでいた。すでにかなり酔いが回って、視線がしかと定まらぬようだった。尾崎の姿が目に入った途端、梶井は飲みかけのコップを手にしたまま、はるか遠くを眺めるような目付きをした。湯ヶ島で顔を合わせてからの出来事を、瞳の奥でなぞっていたのだろうか。その間にも尾崎はつかつかと、アトリエの真ん中まで入り込んできた。一瞬辺りのざわめきはやんだが、蓄音機はメロディーを流し続けている。梶井の心中をいかなる思いがよぎっていたのか。この自分に対する思慕の情と、尾崎の放蕩に対する義憤が入り交じていたはずだ。ただ面と向かつては言えないために、はやりの社会主義に首を突っ込んだ尾崎を、抑や揄ゆするだけに止めたのだろう。

「よう、マルクスボーイ！」

尾崎が堪忍できないことを、梶井は知っていたのかもしれない。その声を耳にするが早いか、気持ちの高ぶりを抑えていた糸は切れた。尾崎の顔は血の気が引いて青くなり、耳の辺りがびりびり震え出した。

「何を、この小僧！」

そう罵倒した尾崎はテーブルの前に迫ると、火のついた煙草を梶井に向かって投げ付けた。それは彼の左の頬に当たると、骨張った皮膚をじりじりと焼いた。火傷の痕に指先を当てながら、赤らんだ梶井の目は無言の抗議をしている。取っ組み合いをする体力などなかったろうが、自身の病気など顧みぬ不敵さがたたえられた。それがますます尾崎の憤りをあおることに

なった。

「足袋を脱げ！」

そう怒鳴った彼は立ち上がった梶井の肩をつかんだ。騒ぎを耳にして飛び込んだ私は、押さえ込んでいた尾崎の腕に、必死にしがみついて叫んだ。

「ねえ、やめて……」

「てめえが俺の顔をつぶしたんだ」

うめくように言い捨てた尾崎は、憎悪むき出しの眼でこちらを見た。次の瞬間、私は力任せに突き飛ばされていた。よろけた拍子に小テーブルにぶつかると、ソースの入った小皿とグラスが割れ、飛沫がドレスの表に散っていた。それを目にした梶井は、雄叫びを上げて尾崎の胸倉に突っ込み、床に押し倒そう

とのし掛かった。その場の男たちに組み付かれながらも、顔面蒼白の梶井は拳を震わせ、焼ける怒りはにわかにならなかつた。

それから二年近くの時が流れた。神戸で再会を果たしたあの日、トアロードの周りを散歩した私たちは、借りていた商家の二階に向かった。日はすでに沈んでいたが、西向きの部屋はまだ暖かかった。外では北風が電線をうならせていても、室内はたまに背後のガラス窓がきしむくらい。目にすべき物など何もないのに、梶井は部屋の電球を点すと、顔がくつきり見える博多人形や、私が絵付けした皿の花柄などを見て、妙にはしゃいで

いた。しゃがみ込むと、卓袱台ちゃぶだいに肘ひじをついて見回している。三好の言葉を伝えると、目を輝かせてこちらを見た。

「ほんまですか。あいつが僕を東京へ呼び出したい、って言ったのは……」

湯ヶ島における二人のわだかまりは、すでに遠くに去っていた。もっと別のことが梶井の心を占めていて、ずっと言い出せずにいたからか。ふいに黙り込んでしまうと、視線を宙に漂わせている。しばらくして、浮かんできくる言葉をなぞるように言った。

「人との出会って不思議ですね。ふとしたことで知り合い、気がつくとも別の道を歩んでいたりする」

「そう望まない場合にも、ね」

「こんなふう考えたらどうですか。別れたとしても、二人の間のしこりなんか幻に過ぎんのだと。そうすれば、また新たな気持ちでやり直せますよ」

「尾崎との間も？」

さあ、それはね、とまで答えて、梶井はいったん口をつぐみ、いたずらっぽく笑うと話を続けた。尾崎のことを「マルクスボーイ」と揶揄したのを、今では悔いているように見えた。というのも、『資本論』を読んで面白さに惹かれ、広い社会に触れてみたいと感じたから、ということだった。そのためにも尾崎と和解して、自分だけではつかみきれない意味を発見できたら、とも語っていた。

「そうよね。尾崎とよりを戻すことはないにしても、文学を志

す者同士、相手の良さは率直に認めていかなければ。私たちはまだ若いんだし、これは、という作品が書けるまでは死ねないでしょ？」

それまでにこやかだった梶井の面から、ふいに笑みが失われた。落ち着きが失われて、胸の内にある何かを抑え込もうとしている。顔を覗くようにして見ると、こちらを安心させたいのだろう、口許だけは笑おうとしているのだが。

「でも、それだけの時間が、僕に残されているのだろうか」

「弱気になっているわね。梶井さんらしくないわ」

「僕らしくない？」

梶井は食ってかかりそうな目をした。何と答えたものかと、私はどぎまぎした。気づいて小声でわびてくれたが、力なげに

天井を見上げています。慰めたくなくて声をかけると、かつて見せたことのない、自嘲した口振りで言い放った。

「つい最近まで自分には、一種の精神主義がありました。心に深く念じていさえすれば、肉体の苦痛など乗り越えられるという……」

「何があっただっていうのよ」

「先日、福知山に向いた時に、思い知らされたことなんです。雪が降ったばかりやったんで、肺をやられたんでとは心配してたんですが、駅のブリッジまで駆け上がった時、硫黄の臭いがある煤煙を吸って、恐ろしい呼吸困難に陥ったんです。息苦しさとはち切れんばかりの鼓動のために、危うく卒倒するところでした。『このまま死ぬんじゃないか』と感じたほどです。その

時、僕は亡くなった父に呼ばれている気がしました……」

「何でそんな大切なこと、先に話してくれなかったのよ？」

「それにはわけがあったんです」

梶井はいったん口をつぐむと、いつもの笑顔を見せようとした。私も気を取り直して、遠くを眺める瞳の中を覗き込んだ。ためらいがちに語り出した梶井は、朗読しているかのように、同じリズムで淡々と述べていった。

「東京では冬が越せないと感じて、大阪に戻ったのは九月の残暑が厳しい日でした。改札を出て通りを進んでいくと、路面は白い光を照り返して、懐かしい阿倍野の家並みが、記憶の底からよみがえってきました。その頃家では母が小間物屋を営み、隣では弟の勇がラジオ店を開いていました。辺りはアブラ蟬の

声ばかりが響き、我が家はもぬけの殻のようでした。突然、弟がラジオ店から飛び出し、僕の方に抱き付いてきました。基兄ちゃんが戻ってきた、と叫んで小間物屋の中に突っ込んでいきましました。恐る恐る戸口の前に立つと、母が店の奥からこちらを見つめています。『お帰り』と言いなながら、いつになく優しい眼差しをしています。僕には母がこらえているのが分かりました。台所の流しの前で、『難儀なこつちや』とこぼしてましたしね。それはそうでしょう？ 何の稼ぎもない大きな息子が、居候しにきたわけですからね。父は茶の間で真っ昼間から酒を飲んでいました。正座して『ただ今戻りました』と言うと、父は『そうか』と答えたきり、手酌で盃を重ねています。父には大学まで行かせてもらいなながら、退学してしまったことをわび

ました。黙ったまま聞いていた父は、『もうええ』と言いました。僕は父がひどく落胆していたのを知っています。近所の人に『お宅の坊、^{ほん}東大に通うてはるそうだな』と言われると、鼻にかけるような父ではありませんが、悪い気はしていません。草稿に手を入れては、時が経つのを忘れていました。たまたま早く床についた日など、父が母に話しているのが聞こえました。『基次郎の奴、何の稼ぎにもならんのに、才能だけ信じて書いてるんやなあ。こっちは何もでけんが、見守っててやろうやないか』そんな優しい物言いでは、面と向かって話してもらったことはありません。僕は胸がいっぱいになってしまい、すぐには眠れませんでした。父は温かい気持ちを抱いていても、心の

空虚は満たせなかつたんでしよう。僕が執筆に打ち込んでいくほど、酒の量は増えていったんです。自分には苛立ちを紛らすことが出来るのに、父には埒が明かないという思いばかり、募っていったんですね。それにしても、父と息子の関係って、不思議ですね。離れつつあるのに響き合ったり、引き合いながら反発したりする。正月の元旦は久し振りに機嫌が良かったんですが、それから二日の夜更けまで、父はずっと飲み続けていました」

「何で止めようとしたりしなかったの？」

「止める？ やめるように言っても、すんなりきく父ではありませんよ。ますます飲み方は速くなり、蒲団に寝かせるとうわ言をしゃべっています。それから昏睡状態に陥って、四日の朝

には寢床の中で冷たくなっていました。傍らで寝ていた母も気づかなかつたほどです。死因は過度の飲酒による心臓麻痺とのことでした。きつと父は生きる張りを失ったんやと思います」

梶井はいったん口を閉ざすと、悲しげに自嘲するような笑みを浮かべた。痰が詰まりそうになり、何度か咳をすると、目を大きく見開こうとする。私は見ていられなくなり、お湯を沸かそうと立ち上がった。ガスの栓をひねりながら、後ろ姿を見つめられている気がした。赤黒くなった夕空を窓越しに眺めて、背後から聞こえる声に耳を傾けていた。

「日はすでに高くなっています。医者が去ってから、父は座敷の真ん中に寝かされていました。通りでは小学生が独楽を回したり、羽根突きをしたりしています。風の吹かぬ静かな正

月でした。澄んだ空はどこまでも果てしなく、窓からは柔らかな光が射し込んできます。そこに正座していると、眠気を催してしまふほどでした。白い切れをそつと外してみると、眠っているのと少しも変わらぬ顔がありました。白いものの混じったひげも、昨夜よりは伸びたかに見えました。僕はどうにも理解が出来なくて、そつと父に声をかけてみました。口は固く結ばれていて、掌を近づけても息はありません。僕は死んだ人に触ったことがなかったんです。それが冒瀆ぼうとくになるのでは、と恐れながらも、掌を震わせて父の額の上に置きました。それは石のように冷たかった。父は死んでいたんです。もう母を怒鳴りつけることはありません。その代わり、飼猫のノボと遊ぶ時に見せた慈父の顔も、二度と目にすることはないでしょう。僕は

涙一つ流れませんでした。父と生きてきた時間は……」

そこまで語ったところで、言葉が続けられなくなった梶井は、目を赤く腫らして嗚咽おえつし出した。こらえ切れなくなった涙は、頬を流れて緋の布地を濡らした。

「すでに終止符が打たれていたんです……。おかしいですよね。何で涙が……」

子供みたいに着物の袖で眼をぬぐうと、無理に笑顔を作ってみせた。ハンカチを差し出すと、手を振って押し返そうとする。梶井の純真さが生で伝わってきたのは、この時が初めてだったかもしれない。

「言葉にしたから、ようやく実感が湧いて来たのよ。泣きたければ思いっきり泣くがいいわ」

「宇野さんはほんまにいけずや」

大阪弁でそう洩らした梶井は、鼻をすするようにして涙を抑え込んだ。大きく息をすると、黙ったままこちらを穴が開くほど見つめている。

「自分を責めたりしてはだめよ」

「そうですね。ただ父は何で死に急いだんやろ……。正直に言つて僕は父が好きやなかつたんです。時には激しく憎んだこともありました。父は僕に寛容やったというのに、自分に甘かつたから厳しくしかりつけることも出来なかつた、というのがほんまの所でしようが」

「腹違いの妹さんの話、以前してくれたわよね」

「ええ。若い頃の父は遊び人で、給料をうちに入れずに妾を

囲っていたので、母は質屋通いまでせねばなりませんでした。

父のような人間にだけはなるまい、と子供ながらに誓ったものです。その自分が京都の三高で寮生活を始めると、さんだ暮らしに身を落としていきました。母がやりくりして仕送りしてくれてるのを知りながら、仲間と一緒に飲み屋を回っては、他の客といざこぎを起こしたり、屋台をひっくり返すなどの狼藉を働いていたんです。酔いがさめてくるにつれ、はたと気がついたものです。『これやったら父と何ら変わらんやんか。そや、父を放蕩へと駆り立てたのは、口ではよう言わんこの苛立ちやつたんや』と。父との間に共通の根を見つけた僕は、初めはひどい自己嫌悪に陥り、それが父に対する哀れみとなり、しまいに自己憐憫へと向かいました。何で阿呆なことしとるんやろ。

自分には文学があるというのに。そう思つて振り返つてみると、奇妙な傾向に思い当たつたんです。僕が荒れた生活をするのは、決まつて筆がなかなか進まずに、その憂さを晴らす必要がある時なんです」

「それつてスランプつて言うんでしょ？ 誰でもそういうことはあるわ。憂さを晴らせば、またペンが握れるようになるものよ」

「僕が言いたいのは、憂さを晴らしたい思いと、創作をしたいという意欲が、実は同じ根から発しているということなんです。父が死んだのは僕のせいや、と初めは思いましたが、父にも僕と同じ『死の衝動』があつたんやと思います。それは自己の枠を破壊しようとする力です。この一つの肉体に閉じ込められて

いるのが我慢ならない、という。前にもお話しましたね。世古の滝を訪れる若者や娘のことを。人目を忍んでやってくる鹿や鳥にまで羨望せんぼうを感じる、つていう思いを。あらゆる存在になつてみたい、というのは、世界と一つになりたい欲望だつて、宇野さんは話してくれましたよね。安易な方法である『死』を選ばぬためにも、僕は書き続けなければならんです」

「分かつたわ。それがあなたの宿命なのね」

「書けなくなった日、それが僕の命の尽きる時かな……」

そうつぶやくように梶井は言つて、いかにも幸せそうに笑みを投げかけた。窓の外はすっかり闇に閉ざされていた。北風もいくらか弱まつて、空にはまばらに星がまたたいていた。言葉はとぎれたままで、卓袱台に開かれた梶井の掌だけが、消えた

続きをとらえようとしている。その時どうしたわけか、青白かった彼の頬が赤らんできた。両手の指を組み合わせて見つめ、何かを言い出そうとして果たせずにいる。上の歯で軽く下唇を噛むようにして、こちらの胸元へと視線を上げていく。しばらくして、一人で照れ笑いを始めると、右の掌をおもむろに開き、手相見を思わせる丹念さで、皮膚に刻まれた細い筋から、自らの運命を読み取ろうとしている。

「良かったら泊まっていつでもいいのよ」

「宇野さん」

梶井はこちらの名を、噛んで味わう感じで発音した。まるで一つ一つの音に魂を込めていくみたいにならなかつた。

「もし、僕が死にそうになったら……」

そこまで言いかけたところで、早くも彼の瞳は潤いを帯びて、喉が詰まって声にならなかつた。何度もどもりそうになりながら、梶井は言いかけていたことを口にした。

「僕が死にそうになったら、枕許で掌を握ってくださいますか」

梶井は潤んだ目のまま、答えを求めてこちらを見つめている。私は一瞬たじろいだのだが、それを見逃す彼ではなかつた。自分分は返答に窮していた。ふうつと、脳裏を幻がよぎっていった。それは臨終を迎えつつある梶井の姿だった。蒲団で寝たきりの彼は、口から酸素の吸入を受けていたが、呼吸は一向に楽にならず、痰が喉に詰まって激しくむせていた。顔はすっかりむくんで、膨らんだ頬のせいで、開かれた眼は線にしか見えず、そこからぼんやり天井を眺めている。母親の他はそばに人を近づ

けたがらず、ひたすらすべてが終わるのを待っている。息を一回吸うたびに心臓が締め付けられ、目尻から涙が湧き出して行く。自分自身が消え去ることが、苦しみからの解放だと分かっているのに、それが無性に恐ろしいのだ……。

驚いて私は目を上げた。眼前には生きた梶井の顔があつた。私がすぐに答えようとしないので、いぶかしげな気色けしきでこちらをうかがっている。私は自分が涙ぐんでいるのに気づき、明るい声を作って言つてのけた。

「いいわよ。握つてあげるわ」

こんなふうにな、とささやきながら、卓袱台の上に開かれた掌を、両手でぎゅっと握り締めた。それは私のよりも一回り大きく、熱を帯びた厚い肉をしている。まるで自分の手が包まれ

るように快い。二人の視線が合った途端、彼は振りほどく形で手を引つ込めた。

突然、梶井は甲高い声で笑い出した。こちらの心中を覗き込む目付きで、まじまじと眼を見つめた後に、私が問いかけるのを遮るみたいにな、早口でまくし立てるのだった。

「来ないでしょうよ、僕には分かっているんだ。きっと新しい相手を見つけて、夢中になつてはいますよ……」

私は呆気に取られていた。何が梶井を苛立たせているのだろうか。胸の内で反芻している間も、彼は口をつぐもうとはしなかった。

「僕が死んだ後も……」

「そんな話、聞きたくないわ」

「宇野さんが僕を忘れようとするればするほど、僕の思い出は悔恨かいこんとなつて。心の内に食い込んでいくでしょうよ」

私の手にはまだ感触が残っていた。その掌が冷たくなる日は来るのだらうか。彼は生きた証あかしを残したがっているのだ。こちらの気持ちも嗅ぎ取ったのか、すぐに梶井の表情は晴れやかとなつた。唇が微かに震えていたが、それはゆつくりと溶けていった。

「忘れられることはないだろう、宇野さんの心の中で……。その時僕は、一人の僕ではなくなっている」

あとがき

この作品を書き始める前、寒さがまだ残る九七年の早春、私は伊豆の湯ヶ島に取材に出かけた。旅館「湯本館」には川端康成が「伊豆の踊子」を執筆した部屋が残っており、宿泊する客には無料で公開されている。「川端さん」と呼ばれている座敷には、執筆当時に近い状態のまま、写真や色紙などが掲げられている。この部屋に逗留した川端に、梶井基次郎は囲碁の相手をさせられたりした。廊下を隔てた川向かいの部屋には、生前の宇野千代がよく泊まりに来ていたという話も、仲居さんからうかがった。

梶井が宿泊していた「湯川屋」は、すでに建て替えられており、当時の面影はなかったけれども、玄関を入ったロビーには、梶井の写真や書簡、遺品などが展示されている。ここで目を引いたのは宇野千代の色紙で、「今あなたの上に現れている能力は氷山の一角、真の能力は水中深く深く隠されている」という言葉には、梶井への温かい眼差しが感じられた。

私はその足で「筧の話」^{かけひ}に出てくる水音を求めて、原文を頼りに杉林の奥に分け入っていった。小さな谷には水はなく、大きな岩が随所に転がり、枯れ草が一面に敷かれていた。苔で滑りやすい岩に足をかけ、行く手を阻むように倒れた竹を乗り越えていったが、春の息吹はそこにはなく、目指した筧はすでに失われていた。

「すばしこく枝移りする小鳥のような不定さは私をいらだたせた。蜃気楼のようなはかなさは私を切なくした」と書かれた幻惑する光景は、梶井の言葉の中にしか存在しないことを知り、軽い失望を覚えるとともに、色あせない文章の力に改めて感嘆した。

梶井の作品には、小説らしい筋が乏しいものが多い。小説らしくないという批評を、梶井は忌み嫌ったというが、確かにその作品の多くは、ボードレールの『巴里の憂鬱』を彷彿させるような、散文詩に似た印象を与える。生のはかなさを繊細な感覚で写し取っているが、文体自体にも違和感を与える仕掛けが認められる。日本語の特徴として、有生名詞と無生名詞が他動詞で結ばれる場合、通常は有生名詞が主語に立ち、無生名詞が

目的語となる。特に有生名詞が語り手である場合には。「私は電報を打った」は普通の言い回しだが、無生名詞が主語で有生名詞が目的語の「滝が私を打った」は非文に近く、「私は滝に打たれた」という方が自然である。

ところが、先に引用した「算の話」の文では、主語の「すばしこく枝移りする小鳥のような不定さ」や「蜃気楼のようなはかなさ」が、語り手の「私」に働きかけており、いわゆる欧文脈の文型が用いられている。欧文脈はオランダ語や英語を、漢文訓読の方法を用いて教授する際に生まれ、西洋文学を模範とした日本の近代文学にも、新しい文体として登場することになった。梶井の文体の特徴としては、不安などの心理的要素が語り手を脅かしている点が挙げられる。日本語らしさに追従して、

「すばしこく枝移りする小鳥のような不定さに私はいらだった。蜃気楼のようなはかなさに私は切なくなつた」と書き換えたら、梶井の原文が持つ病的な感覚は失われてしまう。

先ほどの話に戻ると、算の水音が幻であることを知った後、私はバスに乗り込んで、天城山隧道すいどうの手前で下車した。新天城トンネルの開通に伴い、山道をくねって上らなければならぬ隧道には、バスは通らなくなっている。ここは川端康成の「伊豆の踊子」で有名だが、梶井の「冬の蠅」には気紛れで乗合自動車に乗り、山中に降り立った「私」が、暮れていく山中を、自らを鞭打つように半島の南端へ歩いて行く場面がある。天城山隧道への山道を急ぎながら、作中の「私」が感じたであろう緊張を、追体験しようとしたのである。

梶井の作品を愛読していた私は、書かれた言葉の背後にあるものに触れたくて、梶井が旅した土地を訪れ、さらには梶井が生きた世界を想像しようとした。この小説を書き始めた動機はそこにある。アメリカの文芸批評家ハロルド・ブルームには、『カバラーと批評』という晦渋かいじゆうな名前の著書があるが、隠秘学めいた著作の中心にあるのは「誤読理論」である。ある詩人が先行する詩人を読む際に、影響されまいとする自己防衛から誤読してしまい、後発の詩人の書く作品は、先行する作品の誤読によって生まれたという学説である。誤読の程度が大きいほど、後発の詩人には独創性があることになる。私の場合は、梶井の作品に心酔していたわけだから、誤読の程度は必ずしも大きいとは言えないだろう。

作品化するに当たって、登場人物の名前を、すべて架空のものに変えてしまう方法がよく取られるが、今回は歴史小説のように実在した人物の名前をそのまま使用した。とはいっても、ここに描かれた世界は、多少なりとも私が梶井の作品を誤読した結果であり、描かれた内容は虚実ないまぜである。作中人物の言動の大半は、事実に基づいたものではなく、私が空想したものに過ぎない。ただし、可能性としての梶井の姿を創造するために、多くの資料に当たった。梶井の小説や書簡のほか、中谷孝雄著『梶井基次郎』、宇野千代著『生きていく私』、大谷晃一著『評伝 梶井基次郎』などを参照した。実在した梶井の全貌をお知りになりたい方には、綿密な調査に基づいた大谷氏の著作をお読みになることをお勧めしたい。

二〇二二年二月二十三日

高野敦志